

---

# 英雄王に拾われし子

七瀬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

英雄王に拾われし子

### 【Nコード】

N1481Y

### 【作者名】

七瀬

### 【あらすじ】

Fate/zeroの最後にギルガメッシュに拾われた赤子の話

もちろん二次創作であり、原作は一切関係ありません。

亀更新ですが、どうかお付き合いください。

「雑種よ、我が気まぐれに預かったことを光栄に思うがいい……千

代先まで誇れようぞ  
「

## 始まり

辺りを埋め尽くすのは黒い炎。

道にあるのは死体の山。

さながら地獄絵図である。

そんな中、悠々と闊歩する男がいた。

満身創痍でありながら、しかしどこか高貴な雰囲気をかもしだす金髪の男。

自身から流れる血には気も止めず、この地獄絵図を見て回っている。

「受肉、とはなんたる感覚か……なんとも言いがたい」

男は己を確かめるかのように歩みを進めた。

そして、すでに死んでいる母親らしき死体に守られるようにして安らかに眠っている赤子を見つけた。

## 王の気まぐれ

赤子を片手に抱え、男は考えた。

「なぜ我はこのような雑種を拾った」

男の手に抱かれ、すやすやと寝息をたてている赤子は、何が起きているのか全くわかつてはいないのだろう。

「……わからん」

男はしばし赤子を眺めたあと、呟くように言うと、また歩き出した。

「パスは……切れているか……肝心なときに使えんヤツだ。まあ、いい。ならば暫しの観光とするか」

男はどうでも良さそうに、しかし赤子は手から離すことなくまた歩き出した。

## 英雄と赤子

災害地から抜け出した男が最初にとつた行動は住居の確保だった。

適当な家にズカズカと入り込み、リュックいっぱいのお札束を投げすていい放つ。

「今からコレは我の物だ。金はくれてやる。今すぐ失せろ、雑種」

家主は何事かと思つたが、目の前の大金に抗うすべはなかつた。

こうして比較的大きな家を手にいれた男。

しかし彼は満足はしなかつた。

「この程度の家でわづかながらとはいえ住まねばならぬとは……」

はやいうちに新しい家を調達しようと思つた男であつた。

彼が家に入り、最初にしたことは赤子の世話である。

天上天下唯我独尊を地でいく男とは思えない行動であった。

「牛乳を飲むのではないのか……？」

しかし男は育児にはとことん疎かった。

だが、自分のモノを自分で管理できないなどは自身の性格が許さず、男は育児マニユアルを片手に赤子と向かい合っただけであった。

「やっていられるか！ 王たるこの我がこのようなことをしなければならん！」

赤子を拾って三日目、男はついに匙を投げた。

もともとこういうことは男の得意とすることではないのだ。

今にも家を出ていこうとする男を赤子はじっと見つめていた。

「な、なんだその目は……」

多少の情が移ったのか男の足と決意は鈍った。

もつとも、男が情を誰かに与えること自体、奇跡のようなものなのだが。

「ええい！　こちらを見るな！」

男が赤子に近づくと、赤子はそれは嬉しそうにわらうのであった。



## 英雄王のお引っ越し（前書き）

1話1話が短いですが、何回か更新してまいりますので、ご勘弁を……

## 英雄王のお引越

「王たるこんなところに長々といられるか！」

男はついに我慢の限界だった。

赤子がいる手前、無理に居場所を転々としてはあらぬ不快感を赤子に与えかねない、そう考え男曰くボロ小屋（一般人にすればわりと豪邸）にとどまること約3ヶ月……

男の不満が臨界点を突破した。

「いくぞ！ 貴様ごときに気など使ってられん！」

言うなり男の行動は速かった。

荷物ひとつ持たずに赤子を腕に抱えると家を飛び出した。

それでも赤子が苦しまないように優しく抱えているあたり、男の赤子に対する情の深さが見てとれる。

そもそも男が1個体に情をかけるなど、それこそ天地がひっくり返ろうともあり得ないのだ。

それも男自身が不快感を我慢して世話をするなど宇宙が減びてもあり得ない。

にも関わらず、にも関わらずだ、男は赤子を今もなお世話をしている。

これは気まぐれなどという領域を明らかにこえている。

「ふむ……及第点というところか……」

男が目をつけたのは少し古風な和風の家。

まさに『和』という感じの家であった。

「ここは今から我のものだ！」

そしてまた、男は家をてにいれるのであった。

英雄王と赤子の1日(前書き)

こんなギルガメッシュさんがいてもいいはず。

## 英雄王と赤子の1日

「ギー、ギー！」

「貴様……いまなんといった……？」

男は衝撃を受けた。

男が驚くことなど百年に一度とない。

それ故に男は赤子に聞き返した。

「ギー、ギー！」

「ふはは……フハハハハ！ 名前を！ 我的名前を呼んだぞ！ ただの人間ごときの赤子が！ 我的名前を！」

男、ギルガメツシュは歓喜した。

なぜこのように感情が昂るのかはわからない。

しかし、ギルガメツシュはひたすら赤子を腕に抱いて喜び、そして

……

「ふはは！ 素晴らしいぞ！ 流石ではないか！ ……！？」

そして、自分の致命的な失念に気がついた。

「こやつ……名前が……ない！」

ギルガメツシュは頭をかかえた。

なぜこのような初歩的なことを忘れていたのか、王たる自分にあるまじき失態である、と。

「仕方がない、この我自らが名前をくれてやるとしよう。光栄に思うがいい！」

フハハと高笑いをしたあと、ギルガメツシュは途端に真剣な表情になり、名前を考え始めた。

「やはり我の名前は入れねばな……ギルドレン……ギルランド……メツシュなども……」

凄まじい名前である。

こんな名前をつけられては将来、有望ないじめられっ子になることだろう。

もつとも、そんなことになれば、ギルガメツシュは全身全霊で相手を殺すだろうが……

「しまった！ こやつは冬木、日本の、東洋の人間！ 我のような名前はつけられん！」

ギルガメツシュがこの事に気がついたのは必死に名前を考えはじめてから5時間後のことである。

「ええい！ どうしろと言うのだ！ 王たる我が何故ここまで苦勞して考えねばならんだ！」

そついいながらもギルガメツシュは笑顔であつた。

すでに立派な親の顔である。

「我にここまでさせるのだ……世界一幸せな赤子よのう……」

そついつてギルガメツシュは再び思考の波に身を委ねた。

## 英雄王と赤子の名前

「ギール、ギール！」

「恭介、ギールではない、ギルだ」

「ギール、ギール！」

「ふっ……まだまだ幼いか……」

ギルガメッシュは三日もの間考え続け、ついに赤子に名をつけた。

恭介、それが赤子の名前である、

「我の子なのだ、地球一強い男子になろうぞ……」

最強だから強になんかつけて強介見映えが悪いから変えて恭介。

なんとということだろうか、まともである。

ギルガメッシュという男が名づけたにしては気持ち悪いほどに普通である。



「おお！？ き、恭介ええええ！！ 貴様、歩けるのではないかあ  
あああ！？」

「あーあー、ギール、ギール！」

はたしてこの男は本当に英雄王なのだろうか。

今の彼を見た者全員がそんな疑問が沸き上がるほどにギルガメッシュは赤子、もとい恭介の成長に狂喜乱舞していた。

正直、ギルガメッシュ自身、何故ここまで恭介に入れ込んでいるのかわからない。

だからギルガメッシュは考えることをやめた。

かつて飼い慣らしたライオンに向けた些細な情より強く固い情を恭介に感じていた。

自身の感情、唯一無二のもの、なればこそ自分がどうしようが自分の勝手。

これから先はどうなるかはわからない、途端に興味が薄れ捨てるかもしれない、はたまた情が続くかもしれない、ギルガメッシュはその時まではいままで通り情をかけてやることにしていた。

「フハハハハ、恭介は幸運なやつだ……」

「うー？」

「フン、いましばらく貴様に情をかけてやることにしよう、感謝せよ」

「あー！」

恭介は訳もわからずただただギルガメッシュの腕の中で笑うのであった。

## 英雄王と親子愛（前書き）

1200文字程度に長くしてみました。

これくらいの長さでいいですかね？

しばらくはこのくらいで書いていこうと思います。

## 英雄王と親子愛

結果から言おう。

恭介という人間は大変幸運な人間であった。

今はまだ幼稚園児だが、すでにその片鱗をみせている。

彼が砂場で遊べば砂金が山のように沸き、穴を掘れば埋蔵金が見つかり、くじを引くこと十数回、すべて一等を当て、マークテストをやらせればいかなる難易度であろうとも九割は正解を叩き出す。

もはや呪いの域である。

さらにギルガメッシュという男に育てられたこともあってか、黄金率まで身に付いていた。

しかし……

「恭介が倒れたとは誠かああああ！？」 恭介！ 恭介ええええ！！」

「恭介くんのお父様！？ 落ち着いてください！」

しかし、恭介という人間は非常に病弱であった。それもそのはず、恭介がいた、あの環境下において全くの無傷であるわけがないのだ。

恭介が倒れたとギルガメツシュに報告が来たのは約二分前である。

ギルガメツシュは幼稚園の先生に詰め寄ると肩を強く揺すった。

「落ち着けたと!? ふざけるな!! 恭介が! 我の息子が倒れたのだぞ!? 落ち着ける方が狂っておるわ!! それにも関わらず落ち着けたと!? どうやらそうとう死にたいとみえるな!?!」

「ひ、ひい……」

殺気全開で今にも殺しかねないほどの勢いでさらに詰め寄るギルガメツシュに幼稚園の先生は悲鳴をあげた。

「恭介! 恭介ええええ!!」

「き、恭介くんの体調にさわります!」

「なにっ!?!」

勇気ある幼稚園の先生の言葉にギルガメツシュは固まった。

「くっ……恭介が倒れたというのに、何故、何故我はなにもできない……ッ！」

ギルガメッシュは自分の行動を悔やみ、そして己の無力を憎んだ。

「とりあえず、恭介くんは連れて帰りますか？」

「当たり前だ！」

ギルガメッシュは答えるや否や恭介を優しく抱えると幼稚園を後にした。

恭介が目覚めたのはギルガメッシュが恭介を家に運んでから3時間後だった。

「おとうさん……？」

「おお……目が覚めたか!？」

「あ……うん。おはよう……」

恭介はいまいち何があったのか理解できていないようだが、ギルガメッシュユ、父親の顔を見ると、安心したように体から力を抜いて微笑んだ。

「大丈夫か？ どこか痛いところはないか!？」

「だ、大丈夫だよ……?」

ギルガメッシュユの勢いに若干押され気味に恭介は答えた。

「大丈夫な訳がなからう!! 今月に入って三度、恭介は倒れておるのだぞ!？」

「あ、僕、また倒れたんだ……」

恭介は自分が倒れたことを知り、父親に対する感謝と罪悪感を感じていた。

「父さんは、またずっと僕を看ていてくれたの?」

「当たり前であろう!」

「そっか……ごめんね」

「ごめん……だと?」

恭介のその言葉がギルガメッシュの怒りに触れた。

「ふざけるなよ、恭介。我はお前の世話を苦だと思っている、とでも思っているのか?」

「え……」

「だとしたならば、恭介。お前はこの俺を侮辱したことになる」

「我はお前の父親なるぞ? 息子の世話をすることが何故、苦に思えようか」

「父さん……」

「子供は黙って親の気持ちを享受せよ」



「……ありがとう」

「わかったならば黙って寝てろ。この王たる我自らが恭介のために食事を用意してやる」

ギルガメツシユはそう言つと部屋を出た。

部屋には涙をながす恭介だけが残つた。

英雄王と親子愛（後書き）

ギル「恭介ええええ！！ かつこいいぞー」

先生「あの、お父様、お静かに……」

ギル「恭介の初の晴れ舞台なるぞ？ 邪魔するな。恭介えええええ！！」

先生「他の児童の皆様を晴れ舞台を激しく邪魔していますから！」

ギル「他の雑種なぞ知ったことか。恭介えええええ！！」

先生「あああ、このままではかつてない入園式になっています……」

ギル「しるか。恭介えええええ！！ ……バッテリーが切れた……だと！？」

先生「それでしたら静かに……」

ギル「おい、その雑種。貴様のビデオを使ってやる。ありがたく献上せよ」

先生「恭介くんのお父様あああ！？」

このあと恭介の

「おとーさん、めっ！」  
の一言でギルガメッシュは静かになった。

幼稚園の先生にトラウマを植え付けた恭介の入園式だった。

## 英雄王と今後の方針（前書き）

感想がたくさん、ありがとうございます。

とても励みになっております。

ここまでくると更新しなければ……という義務感が沸いたりして  
ます。

## 英雄王と今後の方針

「変化はあるか？」

「……なにもない……かな？」

「これも……ダメだというのか……」

ギルガメッシュは度々恭介の虚弱体質を治そうとしていた。

しかしどれも望む結果は得られていない。

「次はどうするか……」

「そんなに無理しなくても……」

「馬鹿者が！ 息子の人並みの幸せを願って何が悪い」

「僕はからだは弱くても父さんがいれば幸せだよ？」

「恭介……」

息子の言葉を脳内でひたすらリピート再生しながらギルガメッシュはさらに考えた。

今までにも散々、手は尽くしてきている。

どのような傷もたちどころに治す秘薬、どのような呪いの類いも治す解呪石、反対に体を強化し打ち消しあう、あらゆる縛りから解放される短刀……

これらの他にも様々なことを試してきたが、どれも失敗に終わっている。

「やはり……泥……か」

ギルガメッシュには心当たりがあった。

恭介がいたのは聖杯の泥が溢れるあの環境である。

何らかの被害にあっていたのはいわば当たり前と言えよう。

むしろ、虚弱体質になっただけ、というのは不幸中の幸いを通り越している。

恭介がいかに幸運な人間かがわかる。

「あの聖杯の汚染具合からして、何があってもおかしくはあるまい……となれば、おそらく次の聖杯戦争まで50年とかかるまい……」

「泥による呪い類いなら、本来の聖杯の力により浄化するほかあるまいか……」

「せーはい？」

「なに、恭介は心配いらん。我にすべて任せよ」

「んー……」

恭介はいまいち納得がいかない感じだったが、一先ずは頷いた。

そんな恭介によくできた息子だと感心しながら、ギルガメッシュはこれからのことを考えはじめた。

第一に聖杯戦争に参加するためにはマスターの資格たる令呪が必要だ。

これを他のマスターから奪い取る必要がある。

次に、魔力供給、ただ生活をするだけではギルガメッシュは魔力を必要とはしないが、宝具をつかうとなれば話は変わってくる。

早急に手だてを考えねばならない。

そして最後に、聖杯自体である。

知つての通り、あの聖杯は汚染されている。

それを破壊したがためにあの事態に陥つた。

とあらば、聖杯を聖杯たる状態に浄化し、本来の聖杯の力により恭介を治す。

そのためには、一先ずは汚染されている聖杯を手にいれなければならない。

「この三つが大きな問題点……ふっ、まあ、よい。王たる我……父親たる我に不可能などありはせんわ！ フハハハハハ」

「いきなりどうしたの！？ おとうさん！」

今日も今日とてギルガメツシユ宅は賑やかだった。

それから二日後、ギルガメツシユは一人でアメリカの巨大な博物館に来ていた。



「どれもこれも紛い物にグズばかり……つまらん」

どれもこれも歴史的には名のある有名なものだが、ギルガメッシュにとってはゴミも同じ。

悠々と博物館を闊歩するギルガメッシュ。

そしてあるものに目が止まった。

「空気を発生させ続ける石……か」

ギルガメッシュはこれを使えないかと考えた。

「一先ずは試してやるとしよう……」

ギルガメッシュは言うや否や、管理室へと向かった。

それから10分、博物館はギルガメッシュのものとなった。

「案外、すんなりいったか……」

ギルガメツシュの目の前には、魔力を放出し続ける石があった。

本気を出したギルガメツシュは、約3時間程度で完成させた。

持てるかぎりの宝物ほうもつを使い、空気を魔力に変換、効果を拡大させ、一切の消費をしないように物質変換した。

結果、半永久的に魔力を放出する物質が出来上がった。

「効果は眉唾物だが、試す価値はあろう」

ギルガメツシュはその物質を飲み込んだ。

「……ふむ、悪くない。時臣以上の魔力はある……か」

「ただ、効果をあげすぎたか、流れる魔力が多すぎる。これではあと10年とたん。この我が失敗……？ ふん、笑わせるな。完璧に調節してくれるわ」

これから一時間後、ギルガメツシュは自身の中にある部室の調節に成功した。

最高で遠坂の魔術師クラスの魔力を最低でそこから辺の底辺魔術師クラスの魔力を自由に得られるようになった。

「ふん、我にかかればこのようなこと造作もない」

## 英雄王と切嗣

「なぜ君がここにいる。アーチャー」

「貴様に答える義理などありませんわ。しかし、貴様も中々に様になる格好よのう……雑種にふさわしい」

「……いまの僕には銃器をもつ力もないんだ。今すぐ君の頭をぶち抜いてやりたいのに、僕には不可能だ」

「あまりに滑稽な夢物語よのう……器がしれるぞ、雑種」

ギルガメッシュは切嗣の家にいた。

通常ではあり得ない組み合わせ。

当人たちですら、何故こいつと話しているのか、などと疑問がわいているであろう。

「で、なんで君は僕の家に来たのかと入ってきているのかな」

「答える義理などないと何度言わせるつもりだ？」

「不法侵入して何をいつてるんだ……」

お互いの話は平行線、なかなか交わらない。

「雑種、王の話の聞きなければそれなりの態度があるう」

「君は一体何様のつもりだ!？」

「王だ!」

なんとも笑えるやり取りである。

こんな二人の会話が噛み合うことはなく、さらに時間だけが経過した。

「わかった、僕に話をきかせてくれ」

そしてついに切嗣が折れた。

彼はそうとうギルガメッシュと二人でいるのが嫌らしい。

「感情がこもっておらん、上っ面だけで我の話をきけるとでもおも

うてか、雑種？」

「ブチン

何かが切れる音がした。

これは擬音などの類いではなく、本当に何かが切れる音がした。

「ふざけるな！ 君は一体なんなんだ！？ いきなり家に押し入って長々と意味もなく居座り、用も話さない！ 僕が早く終わらせようとしてるのにお前一向に態度をかえない！ なんなんだお前は！ 魔弾撃ち込むぞ！」

切嗣はついに我慢の限界だった。

それもそのはず、いきなり家に押し入って長々と意味もなく居座り続け、さらにはあの発言の数々、誰でもキレル。

「……はあ」

ついにキレた切嗣をギルガメッシュは冷ややかに見据えたため息をついた。

「なんだ……？」

「雑種よ、まだわからぬか？」

「わかる要素がないぞ？」

ギルガメツシユは静かに続けた。

「我が押し入ってやったのはいつだ？」

「？ 確か朝に士郎を見送ったあと……」

切嗣はギルガメツシユの意図する意味が理解できないまま答えた。

「……まだわからぬか。貴様は生きてる価値すらなかるう」

ギルガメツシユは立ち上がると王の財宝を展開し、中から適当に振り出しの剣を取り出した。

そして切嗣めがけて突き刺した

「っ！？」

かのように見えたが、ギルガメッシュの手にある剣は切嗣の横の壁に深々と突き刺さっていた。

ギルガメッシュは切嗣を壁に押し付けながら怒鳴るように言った。

「まだわからぬか!? あの小僧はなんだ! 聖杯の入れ物……貴様の娘は一体どうした!？」

「な……に……?」

切嗣は目を白黒させながら必死に理解しようと努めた。

「貴様が真に一緒にいなければならないのは誰だ!? あんな小僧ではなかるうが!！」

が、切嗣には理解できない。

その王らしからぬ彼の言動を。

「答える、切嗣!！」

「……!」



ギルガメツシュの言葉により、一気に現実に引き戻された切嗣。

「僕に……娘と呼べる人は……いない……」

「歯を食いしばれ、切嗣ッ！！」

うろたえながら答えた切嗣にギルガメツシュは切嗣が死なない程度に手加減を加えて拳を振り落とした。

「しっ！」

壁に叩きつけられる切嗣。

「貴様は、親の心子知らずという言葉をしっているか？」

「……？」

「そんなのは当たり前だ、何故なら、親の心とは常に子供に対して一方通行だからだ。自分の考えを子供に押し付けても何一つうまくないかん」

「その言葉はそういう意味じゃなゲフツ！」

「だまらんか」

ギルガメツシユは再び切嗣を殴った。

「勝手に苦しみ、娘を傷つけるな。貴様の娘は今もただ広い城で待っているだろう。親が嫌いな子供などいはしない、小さい頃にこそ、親が必要だ……」

「……」

切嗣は啞然とした。

これが本当にあの英雄王、ギルガメツシユなのだろうか、と。

もし、何らかの魔術により見た目だけを変化させていると第三者から言われれば、一も二もなく信じるだろう。

「……貴様には、時間がないのだろう。早くいけ」

「……だが、僕は」

「ああ、めんどくさいやつよう！ 黙っていけ！」

ギルガメツシユは懐から札のような物を取りだし、切嗣目掛けて投げつけた。

「なっ!?!」

札から光があふれだし、切嗣を包みだす。

「とりあえず会え、まずはそれからだ」

「アーチャー……っ!」

ギルガメツシユは不敵に笑みを浮かべ、光のなかにいる切嗣を見送った。

後にはギルガメツシユだけが残った。

「さて、小僧にも一応話をしといてやるつか。コーヒーは……ちっ、安物しかないではないか……」

このあと散々家を荒らしたギルガメツシユは、帰ってきた士郎に父

親は出張だと告げ、衛宮宅をあとにした。

英雄王と切嗣（後書き）

ギル「名前か……明らかに東洋にしては違和感があるだろうな……」

ギル「ん？ この菓子は……」

ギル「よし、ギルバート・アルフォードにしよう」

こんな感じで名前を作ったギルガメッシュさんでした。

## 英雄王と切嗣2

「呆れたものだ。わずか一年足らずで戻ってくるとは……」

「士郎も、僕の子だからね。それに……」

ため息をつきながら言うギルガメッシュに切嗣は答えた。

「こんにちは、おじさん」

「……なに……？」

「イリヤ、ついてきちゃったし」

少女、イリヤが切嗣の後ろに隠れながら顔だけだして挨拶をした。

「よし、ガキよ。二つ貴様に言葉を授けてやろう。一つ、我はお兄さんだ！ 一つ、切嗣は先が長くない。一緒にいてやれ」

「……うん……」

最初はキョトンとしていたイリヤだが、意味を理解すると笑顔で答えた。

「貴様に我が目にいれても痛くない息子と会うことを許可しよう」

「本当？　しょうがないからあってきてあげる！」

「しょうがないとはなんだ！　雑種うつつうつつ!？」

「あははは〜」

ギルガメッシュとイリヤのおいかけっこが始まり、終わったのは一時間後だった。

「大人げないぞ、アーチャー」

「……ギルでいい」

「……は？」

「ギルと呼ぶことを許すといっておろう。いつまでもアーチャー、アーチャーと呼ばれるのは正直嫌気がさしてきた。恭介にもアーチャーってなに？ とか聞かれる始末。我は普通の父親でありたい」

疲れたかのように答えるギルガメッシュに切嗣は内心笑いながらも、機嫌を損ねかねないので表情には出さなかった。

「ではギル。君は変わったな」

「知らん。恭介には我をもこえるカリスマ、または幸運をもってるのやもしれん。とにもかくにも、我は恭介を好いておる」

「とんだ親バカだな」

「ぬかせ。貴様もそうであるう」

吐き捨てるようにギルガメッシュは言い、切嗣を見据えた。

「そうだね。ここまできて、イリヤや士郎とやりたいことがたくさんできてしまった」

「……もう、永くないのか」



「うん。自分の身体だ、自分が一番わかる。僕はもう……永くない」

「そうか……」

ギルガメッシュは短く答え、庭で遊ぶ恭介とイリヤをみた。

楽しそうに遊んでいる微笑ましい光景をみて、不思議と笑みがあふれた。

「ガキはどつする」

「どつしようかな……でも今は、二人との時間を大切にしたい」

「先送り、か……まあ、よい」

ギルガメッシュは何か思うところがあるのか、何かを考えているようだった。

「そういえば、ギルは聖杯戦争のあとはどつしてたんだい？」

「恭介を育てていた。よくできた息子だ」

「君はどうして受肉を……」

「我は同じ父親としては貴様を認めてはいるが、王としては同じ空気を吸うのも腹立たしい。思い上がるな」

「ははは、手厳しいな」

冷たく言い放ち、自分のことは話さないと意思表示するギルガメッシュに切嗣は笑うしかなかった。

「士郎、醤油とって」

「ほい、あんまりかけたら身体に悪いぞ?」

「そっよ、切嗣」

子供二人に心配され、少し嬉しく、少しなさけなさそうに切嗣は笑いながら醤油を料理に垂らした。

「む………?」

そして料理を一口、再び箸を置き、醤油を垂らした。

「じーさん、かけすぎだ!」

「からだ悪くするわよ、切嗣」

「あはは、厳しいな、二人は……」

再び料理を口にする切嗣。

「……………」

そして無言になる。

「どうした、じーさん?」

「切嗣……?」

そんな切嗣を見て不思議に思い、二人は声をかける。

「……しよっぱい」

切嗣は箸を置き、呻くように呟いた。

「だからかけすぎだっていったろー」

「切嗣は加減を知らないのよー」

二人は笑いながら言い、再び食事を再開した。

「（味が……しない。そうか……もう、なのか……）」

「じーさん?」

箸が止まる切嗣を見て士郎が声をかける。

「この味噌汁、美味しいね」

「あ！ それ、私も作ったの！」

イリヤが手を上げ大きな声で言う。

切嗣に美味しいと言われたのが本当に嬉しいらしい。

「イリヤは、良いお嫁さんになるよ」

「やだ、切嗣ったらー」

楽しい雰囲気が進む食事は、とても危ういバランスで保たれていた。

「（僕はあと……どれくらいもつ……僕が二人に望むことは……）」

英雄王と切嗣3 (前書き)

遅くなりました！

本当にすいませんでした……

週に一回は更新したい……

### 英雄王と切嗣3

「わざわざ王たるこの我が見舞いにきてやったぞ、感謝せよ」

「ギル……か」

「ずいぶんとらしい姿になったではないか」

「嫌味な男だね、君は」

「死に瀕しているからとて我は態度を変えんぞ」

「変えられても困るよ」

切嗣の病室に入り込んだギルガメッシュはドカッと椅子に腰をかけた。

「飲むか？」

「ここは病室だよ。それに、僕に味覚は、もうない」

「ふん、馬鹿が。酒とは、味は二の次だ。真に楽しむは、肴と飲み

相手だ」

ギルガメツシュは不敵に笑みを浮かべ、グラスに並々と注いだ酒を喉に流し込んだ。

「それなら、僕はおめがねにかなったのかな？」

「いないよりはマシ、といったところか」

「ははは、うれしいよ」

切嗣は微笑むように笑い、グラスを受け取った。

「うん、味がわからない……でも、美味しいよ」

「ふん……」

しばらく二人で飲みとおしたあと、ギルガメツシュは口をひらいた。

「あと、どれくらいもつ」

「……あと、一月持たないと思っ」



「……短いな」

「長く持った方だよ」

「そうか……」

二人はグラスを片手に動かなくなる。

病室を沈黙だけが支配した。

「ギル、僕はね、正義の味方になりたかったんだ」

そんな沈黙を破るように、切嗣が口をひらいた。

「ふん、戯言を」

そんな言葉を聞き、ギルガメッシュは吐き捨てるように答えた。

「うーん、割りとは本気なんだけどなあ……」

「なればこそ、余程に質が悪い。何故ならば、正義の味方などというものはなろうとするものではないからだ」

「それは……」

「なにかを成し遂げ続けた結果、民衆から正義の味方と称されることはあるう。だが、正義の味方になるのが目標になったならば、それは……」

ギルガメツシユは酒を一気に飲み干すと、切嗣を見つめ、告げた。

「それはすでに、破綻している」

「……………」

切嗣は無表情のまま、ギルガメツシユをみる。

「それでも、それでも、僕はやっぱり……」

「ええい、皆まで言うな。そう簡単に切り捨てるものでもなからう。そのまま朽ち果てるもよし、自分の理想を押し付けるもよし」

「……………押し付ける？」

「士郎……だったか？ あやつにも素質があるつて。貴様が今の話をしてやれば、その生涯を借り物の理想に使い果たすことだろう」

「それは……」

下を向く切嗣に笑いかけ、ギルガメッシュはこう続けた。

「せいぜい悩むがよい切嗣。貴様と過ごした短い時間は、まあ、有意義であった」

これを最後にギルガメッシュと切嗣は二度と会うことはなかった。

「なあに？ 切嗣？」

「そつだぞ、じーさん」

切嗣は二人を呼び出していた。

自身の命がもう、持たないと悟ったためだった。

切嗣は病室やその他身の回りのことを手配してくれたギルガメッシュに感謝をしながら、目の前の二人を見つめた。

「僕はもう、ながくない。最後に一人と話したくてね」

「切嗣……」

「じーさん……」

精一杯の笑顔を浮かべる切嗣に二人は押し黙る。

もう、本当にながくないと、わかった、わかってしまった。

「イリヤはお姉ちゃんだから、士郎のことを頼むよ。何があっても、士郎を守ってあげてほしい。しっかり者のイリヤには、言わなくても大丈夫だったかな？」

「うん……当たり前、じゃない……」

切嗣の手を握り、震えるイリヤを優しく撫でる切嗣。

「すぐに、迎えにいけなくて、ごめんね……僕は、なにもしてあげ  
れなかった……」

「そんなことない……そんなことないわよ……」

涙を流すまいとするイリヤを優しく抱きしめ、切嗣は士郎を見た。

「士郎……僕はね……」

英雄王と恭介の日常（前書き）

ギルガメッシュさんブレないなあ……

書いてて楽しいです。

## 英雄王と恭介の日常

「イリヤねーちゃん、いなくなっから暇だなあ……」

「ふん、高貴なる恭介があのような雑種（ゴキウ）ときと群れる必要などない」

「お父さん……？」

「す、すまん」

「気まずそうに茶をすすするギルガメッシュを見ながら恭介はため息を一つついた。

「父のことは尊敬しているし、大切な人だが、こういうところは直してほしいという思いからでたため息だった。」

「き、恭介……週末は釣りにでもいこうぞ？ まさか父親たる私の誘いを無下になどせぬよな……？」

「そんな不安そうに言わないでよ。おこってなんかないからさ」

ギルガメツシュなりの精一杯の機嫌とりに恭介は苦笑しながら返した。

「そ、そうか……い、いや！ 断じて！ 断じて我は不安そうな声など出してはおらぬ！ 断じてだ！」

「あはは、わかってるよー」

英雄王を手玉にとる恭介。  
なかなか侮れない。

これでまだ年齢が一桁だといふのだから未恐ろしい。

「……本当だ」

「わかってるよー」

「……本当に本当だ」

「わかってるってー」

「……」

「わかってるってー」

「そうか……」



恭介はこういうギルガメツシュが大好きだった。

「む？」

ギルガメツシュの膝に座ると、一緒にお茶を飲みだした。

「僕はお父さん大好きだよ？」

「そ、そうか？ ……ふは、フハハハハ！ 当たり前だ恭介よ。親が嫌いな子などいはいはしない！ 逆に、子が嫌いな親もいはいはしない！ 我も大好きだぞ、恭介ええええ！」

「くるしい、くるしいよ父さん」

「おお、すまん！」

強く抱きしめられ苦しむ恭介に謝りを緩めるギルガメツシュ。

「お父さんは加減を知らないんだよ」

「すまん」

「外ではなおさら」

「すまん」

「正直恥ずかしいし」

「すまん」

「幼稚園の入学式と卒園式なんかビデオで見てちょっとトラウマだよ」

「……すまん」

「いつもお友達に恭介のお父さん少し変だって言われるし」

「……すまん」

「あんまりひどいと、僕、悲しいよ」

「すま……ん……」

「な、泣きそうな顔しないでよ」

「泣きそうになってなど……」

「そんなお父さんが大好きだから」

恭介はギルガメッシュに抱きつき甘えるように言った。

「……すまん」

ギルガメッシュも答えるように恭介を抱きしめ返した。

「完成したぞ……！」

広い荒れ地にギルガメッシュは立っていた。

元々この荒れ地は、広大な木々が茂っていたのだが……

「これで、制御は完璧なものとなった……宝具の解放連続五回、王の財宝ゲートオブバビロンの自由展開ならびに制御……完璧だ……これで……」  
ギルガメッシュはその場に座ると、王の財宝におもむろに手を突っ込んだ。

「これで一切整理できていなかった恭介の写真を整理できるっ！  
恥ずかしかつてアルバムは全部隠されてしまったからな。予備を取  
つておいて正解だった。ではさっそく……」

「おお！ いきなりハイハイする恭介ではないか！？ 次は抱っこをせがむ恭介！ さらにこちらは初めてのお使いで戸惑う恭介！ うおおおお！ ナイスだ！ ナイスだ昔の我！ 流石は最古の王たるこの我！」

狂喜乱舞しながら写真を整理していくギルガメッシュ。

その手が止まった。

「こ、これは……これは恭介が我のために……我のために！ 初めて料理を作ってくれたときの写真！ ヤバい、これはヤバいぞおおおお！ 黄金色に輝いている……素晴らしい……」

「なっ！？ さらにこれは……っ！」

こんな感じでギルガメッシュが帰ったのは次の日の昼過ぎ、恭介に心配したと泣かれ、自身の首を切りそうになったギルガメッシュであった。

英雄王と冬の一日（前書き）

雪、降りました。

## 英雄王と冬の一日

「お父さん！ 起きて起きて！」

朝一番、恭介は起きて外をみるとギルガメッシュの寝室へおしかけた。

「む……恭介か……もう少しねかせろ……我は恭介の寝顔を夜遅くまで見ていて眠いのだ……」

「そんなことしてたの！？ ってそんなことはどうでもよくて、あ、いや、よくはないけど。とにかく外をみてよ！」

「ああ……引っ張るな、引っ張るな恭介」

眠たそうにうめきながら、それでも起き上がり、ギルガメッシュは外をみた。

「すごいでしょ!？」

「……雪だな」

心底どうでも良さそうに言うギルガメツシュとは対照的に目をキラキラと輝かせている恭介。

年に似合わずしっかりした恭介だが、こういうたまにみせる子供らしさが微笑ましい。

「雪だよ、雪！」

「雪だな……雪……よし、寝る」

あー寒い寒いと布団に入ろうとするギルガメツシュを恭介は止める。

「なんでねるのさー！」

「寒いではないか。王たるこの我が、百歩、いや、一億万歩譲ってこの環境にあまんじているのだ。これ以上は不快な思いを堪えてたまるか」

そついい、布団に潜ると、ギルガメツシュは再び眠りにつこうとする。

「……せつかくの雪なのに」

「……」

「お父さんとあそびたいなあー」

「……」

「泣くよ？」

「……」

「くすん……」

「ほ、本当に泣くではない！」

恭介がなきかけたとき、ギルガメツシュは勢いよく布団から起き上がった。

「わ、わかった！ 起きてやろう！ だから泣くな！」

「……本当に？」

「王に二言はない」

「わーい！」

とたんに笑顔になりギルガメツシュを引っ張る恭介に、騙されたと思いながらギルガメツシュは居間へと向かった。



「寒いな」

ギルガメツシユは席につくなり言った。

「冬だしねー、はい、ご飯」

「うむ。いただきます」

ご飯を口に運びながらギルガメツシユは恭介をみた。

「なんだ？」

「ご飯食べたらさ……」

「ああ、言わずともわかっておるわ」

「えへへ」

嬉しそうに笑う恭介。

「炬燵をだしてミカンを食そう」

「違うよー!!」

「おおー!?!」

勢いよく叫ぶ恭介に驚くギルガメツシユ。

「いや、外は寒いではないか」

「雪降って積もってるんだよ!？」

「見ればわかる。バカにするでない」

「ああ、もう!」

意地でも外にはいきたくないギルガメッシュ、反対に恭介は父親と外で遊びたいらしい。

「お願い!」

「いくら恭介であろうとも、我は絶対に動かん」

いつの間に出したのか、ギルガメッシュは炬燵に入るとミカンを片手にテレビを見だした。

これがあの英雄王とは絶対に思えない。

「…………撮ってもいいから」

「なんだと…………?」

「しゃ、写真、撮っても…………いい、から…………」

恥ずかしそうにそっぽを向きながら言う恭介。

「恭介、その言葉に一言はないな……？」

「な、ない……よ」

「ふはは」

手を顔にあて、立ち上がるギルガメッシュ。

「フハハハハ！！ さあ、いくぞ恭介！ 何をぼさつとしている！  
？ 早く準備をせぬか！」

「え、あ、うん……」

「ちょっとまで、恭介」

「え？ なに？」

「何を着ようとしている？」

「え、ジャンパーだけど……」

「馬鹿者が！」

「ええ！？」

恭介の肩をつかみゆするギルガメッシュ。

「毛糸の帽子にマフラー、手袋は常識であろう！」

「お父さんの常識で物事をはからないでよー！」

あーだ、こーだ、といいながら、二人で外で遊ぶのであった。

英雄王の子供と破綻した男（前書き）

シリアス……かな？

## 英雄王の子供と破綻した男

ある日、買い物に出かけた恭介は帰り道にある公園で不思議な人物に会った。

ただベンチに座り、空を無気力に眺めているおそらく長身の男。

思えば買い物に行くときもベンチに座っていた。  
不思議と惹き付けられ男の隣に恭介は座った。

「……なんだ、お前は」

「こ、答えにくいなあ……」

「お前は……いや、なにもいうまい……」

二人の間に会話などなく、ただ空を見上げているだけ。

それも子供と大人、はたからみれば家族に見えなくもないだろう。

「答えろ、なぜ隣に座った？」

しばらく空を見上げていると、男が不意に質問を投げかける。

「んー……なんでだろ。よくわからないけど、惹かれたってというか……なんていうか……?」

「答えになっていない。が、言わんとしていることは伝わった。そうか……お前も……」

男は再び空を見上げた。

時間はすでに夕方。

空を夕日が染め上げている。

「お前は、この空をどう思う」

男は視線を空に向けたまま、恭介に問いかけた。

「え? きれいだなーって」

「……それが、普通だろう。だが、私には到底美しいなどとは思えない。愛、感動……私には理解できない。妻が死にそうなとき、私は自らの手で殺したいと思った。私は、壊れている。人として、破綻している」

独り言のように淡々としゃべる男。

「それって、いけないことなの?」

「なに……?」

「周りとの同じじゃないといけないなんて、おかしいじゃん。生まれ持った性質はどうしようもない、だから、それを抱えて生きていくしかない。人と違うだけで、人並みの幸せを感じることができないなんて、おかしいよ」

恭介はまっすぐに答える。

「私は、師と呼んだものを己の快樂のためだけに、殺しているのだぞ? それでも、同じことが言えるか?」

「それでも、周りと違うだけで、幸せを望んじやいけないなんて、おかしいよ。無気力に、なにも思わず、淡々と生活して、ただ生きているだけなんて、死ぬよりツライと思う」

「……そうか」

「僕もおかしいんだ。昔から病弱で、倒れるたびになにかが、欠落してるんだ。なにかが僕の中からなくなってるのはわかる、でもそれがなんなのかわからなくて、それが普通になって………どんどん、人じゃなくなっていくみたいで、震えるほど………怖い」

「……………」

「他の人といるとわかるんだ、自分が普通じゃなくなっていつてるのが。前は普通にできたことができない、前は感じたことが感じれない。前は一緒に景色を見れたのに、今は一歩下がって冷めた目



線で景色じゃなく、彼らを見ている」

「……………」

「でも、僕には父さんがいるから」

「……………父？」

「僕に足りないものを与えてくれる。一緒にいると、心が満たされて、こんな僕でも生きていていいんだって、思える。僕の唯一の理解者で、絶対に失いたくない、大切な人……………」

年齢が二桁になっていない子供の台詞とは思えない言葉。

それも、恭介の歪さ故のことだろうか。

「理解者……………か」

恭介の話を興味深げに聞いていた男は呟くように言った。

「私と同じ歪さをもった男がいた。お互い、本質的には似ていながらも、相容れることはなかった。私たちは戦い、私は死んだ。死んだはずだった……………だが、私は何の因果か生きながらえ、最近、男は死んだらしい。喪失感だけが、私を支配し、体に穴が空いているようだ……………」

男は、光を宿さない虚無な目で遠くをみていた。

「なら……」

恭介は立ち上がり、男に手を差し出した。

「む……？」

「なら、一緒に探そう。貴方の欠落した部分を埋める、なにかを」

「……そのようなことは、考えもしなかった」

意表をつかれたように、少し狼狽える男。

そして立ち上がり、恭介の手をとった。

「僕は恭介。恭介・アルフォード。貴方の名前は？」

男は恭介の名前を聞き、頭のなかで数回繰り返したあと、名乗った。

「言峰……綺礼」

## 未来の英雄王と恭介

「……………ん……………朝……………おきなきゃ……………?」

「……………んう……………」

「え、誰……………!?!」

朝、恭介が目覚めると、自分と同じくらい金髪の整った顔立ちの子供が隣で寝ていた。

混乱する頭を必死に落ち着かせ、状況を整理しようと試みるが

「ダメだ。まったく理解できないよ……………」

考えれば考えるほど混乱に陥り、状況を理解できない。

一先ず起きようにも、隣の子供が起きかねない。

そうなってしまうえば最後、一悶着おこるにきまっている。

そう考えた恭介は一度、横になり、再び状況を整理しようと努めた。

昨日の夜9時に寝る

いつも通り朝5時に起きる

隣に子供がいた

「……………なんでさ」

なんとか絞り出した言葉はむなしく部屋に響き、消える。

そもそも何故、自分の隣に同い年くらいの子供がいるのだろうか。

父さんがいるから、不法侵入はあり得ない。

ならば、父が招いたことになるのだろうか……

いや、むしろこの子が父ではないのかとさえ思えてくる。

「ないない、父さんな訳がないじゃん。子供だし、うん」

「でも……父さんだしなあ……」

自ら発したその言葉に妙な説得力を感じ、恭介は苦笑した。

「とりあえず、このままじゃなにもできないし、起こそうかな……」

「えっと……?」

「んじ……」

軽く揺すってみるが、全く起きる気配はなく、小さくうめくだけだった。

「……………どうしよう」

いかに適応力の高い恭介といえども、今回の一件は些か困惑気味である。

「あ、朝ですよーい……………」

「ううん……………あと……………50年……………」

「す、すごい単位だー……………あははー……………」

恭介の中で警報が鳴り響く、この子は普通じゃない、と。

何を今さらと思いつながら恭介は心の中で叫んだ。

「（第238回！ 脳内会議！）」

「（はーい！）」

恭介の周りに手のひらサイズの小さな恭介が現れる。

全部で四人、それぞれの額に番号が書いてある。

「（これは、関わらないほうがいいよ！ そもそも人の布団に入ってくるとか普通じゃないよ！）」

一番が手を挙げ、言う。

「（でも、お父さんと同じようなにおいがするよね？）」

「うんうん、世話してあげなくなる雰囲気とかそっくりだし！」  
「二番がいい、それに三番が同調する。」

「（だが、関わったらめんどくさそうだぞ？ ……それに、父さんに迷惑もかかる）」

四番は腕を組な、最後の方は恥ずかしそうに言った。

「（とりあえず、いまやれることをやっちゃおうよ）」

「（そうだな）」

三番が最後にまとめ、みんな口々に肯定の言葉を口にした。

「よし、今は朝ごはんを作っちゃおう！」

「……………うごけないだった……………」

「いったい今までの会議はなんだったのだろうか。」

「離して……………」

「はい、わかりました」

「え」

いつの間にか抱きつかれていた恭介はあっさりと解放された。

「起きてたの？」

「はい、面白かったので、ついからかってみたくなって、寝たふりをしていました」

「ひ、ひどい……っと、貴方はだれ？」

「はい、僕は貴方のお兄ちゃんです」

「え、僕の他にもお父さんの子供っていたの？」

「いえ、僕は僕の息子じゃないですが、恭介のお兄ちゃんです」

「……？」

この説明で納得できるものがあるならば会ってみたいものだ。

子供の説明は恭介を混乱させるばかりで、一向に話が進まない。

「からかってるでしょ？」

「あ、わかりました？」

「殴るよ？」

「すみません」

拳を構える恭介に両手を上げて苦笑いする子供。

「僕は貴方のお父さんの昔の姿です。何をどうやったらあんな風になるのか……正直、怖いですよね」

「……お父さんならあり得ると思うっちゃう僕っておかしいのかな」

「上手く適応してるんじゃないですか？」

子供、もとい子ギルは笑いながら答えた。



未来の英雄王と恭介の状態（前書き）

初の2000文字越え……

## 未来の英雄王と恭介の状態

「恭介の作るご飯はおいしいですね」

恭介とギルガメツシユの二人は食卓を囲んでいた。

朝食というには些か豪華なものではあるが、お金の心配をしないで済むためか、最近はこのような食事になりがちである。

卵焼き、野菜炒め、魚の塩焼き……その他8品食卓にが並んでいる。作りすぎたのではなく、素でこの量である。

これは、最近の恭介の趣味が料理なためでもある。

その前は掃除、そのまた前は裁縫となんと家庭的なもので、ギルガメツシユには好評であり、それがまた恭介に拍車をかけるのである。

「そう？ 褒めてもデザートくらいしかでないよ？」

「デザートがでるんですか……僕にとっては純粋な褒め言葉だったのですが、なんかねだったみたいで気が引けますね……」

「気にしないでいいよ。まあ、プリンなんだけどね」

「自家製ですか。いただきます」

ギルガメツシユは両手で恭介からプリンを受け取ると、美味しそうにそれを頬張った。

恭介もそれを見ると、満足気な表情で自分の分のプリンを手にとった。

「で、なんで父さんは子供の姿に？」

「好きでこうなったわけじゃないですよ。ただ、恭介と直接会えたのは嬉しいので、今はむしろ戻りたくありませんね。そうも行かないわけですが……」

とても残念そうにプリンを食べながら言うギルガメッシュ。

その姿はいつものギルガメッシュの姿ではなく、ただの子供のように見える。

「というのも、若返ってるのは姿だけではないんですよ」

「えっと……」

よく意味が理解できずに頭の上にハテナマークを浮かべる恭介をみて、少し笑ったあとギルガメッシュは続けた。

「未来の僕が反魂の秘薬を水と勘違いして飲んだみたいです」

「反魂？」

「ええ。反魂の秘薬とは文字どおり、肉体のみならず魂までも若返らせることができる秘薬です。つまり、精神年齢も下げられるのです。だから僕は恭介と同じ年齢の頃のお父さん……ギルガメッシュです。気軽にギルと呼んでくださいね」

笑顔でいうギルガメッシュをみて恭介は内心驚いていた。

あの父さんも昔はここまでまともだったのか、と。

確かに恭介はギルガメッシュを慕い、尊敬しているが、ほんの少し、極僅かではあるが、性格がアレだと思っていた。

だがどうだろうか、今日の前にいる昔のギルガメッシュはこんなにもまともで行儀が正しく社交的だ。

恭介が思い至ったことはただひとつ、彼の半生に何があったのかはわからないが、ヘタをすれば自分もあの父親のような性格になるかもしれないという可能性だ。

恭介はそうはならないようにと深く心に刻みつけた。

「怪しい物をいっぱい持っているとは思ってたけどそんなものを持つてたんだね……」

「これはほんの一部にしか過ぎませんよ？　まだまだたくさんありますが、回復効果のもつ薬全般はすべて恭介に一度は使っています。未来の僕はどうしても恭介の体質を治したかったみたいですね」

「僕の……?」

全く想像していなかったことをいわれた恭介は驚き、聞き返す。

「ええ、ですが流石は泥といったところでしょうか……全く効果がないどころが、薬の魔的な力だけが体内に蓄積しているみたいですよ」

「え、えつと……」

「簡単に説明しますと、薬の効果が発揮されず、薬の魔力だけが恭介の体内に残り、その容量が恭介の限界ギリギリの数値まで高まっています。コップをイメージしてください。コップを恭介とたとえると、薬を使うことにより水、つまり魔力をそこに注いでいるわけです。結果、コップの限界、恭介の受け容れることができる容量をオーバーしそうになっているわけです」

「あふれたらどうなるの？」

なんとか理解するように努める恭介。

そして楽しそうに話すギルガメッシュ。

会話内容はともかく、光景そのものはまるで兄弟である。

「あふれた場合は体内で魔力が暴走して保てなくなってしまう最悪の場合、死にます」

「死ぬ……」

「さらにはどういうわけか聖杯の泥に尋常じゃない魔力が共鳴し、擬似的な魔術回路を形成しています。おかげで魔力が体内に残留し出て行かない状態です。それどころか、擬似魔力回路に魔力を勝手に無尽蔵に供給しているらしく魔力が尽きません。このまま、何らかの要因で魔力が恭介に流れ込んだ場合、簡単に限界をこえます」

「つまり、僕ってすごい危ない状態？ それに聖杯の泥って……？」

「危ないですね、すごく。聖杯については未来の僕がするでしょう。」

それから数日後に恭介はギルガメッシュからすべてを聞くが、それは別の話である。

「で、このままではまずいとおもった未来の僕は、反魂の秘薬を使い、恭介の状態をリセットしようとしたわけです。ですが、効力を発さなければ自殺行為のため、状態を変化させ、恭介の中に魔力を帯びた物質が残らないようにしたのですが……疲れていたのか、手元の水と間違い反魂の秘薬をのんだみたいですね」

なんとも間抜けな話であるが、ギルガメツシュの恭介に対する情の深さがうかがえた。

「で、僕がでてきて、せつかくだし恭介と寝ようとして、さっきの状態になるわけです。納得できましたか？」

「さすがに無理だぁぁぁぁぁ！」

笑顔で言うギルガメツシュに恭介は怒鳴るように叫んだ。

## 未来の英雄王と恭介の状態（後書き）

ギル「今まで黙っていて済まなかった」

恭介「大丈夫だよ。僕が父さんの本当の子供じゃなかったり、聖杯の泥つてやつに犯されていても、いままで父さんはずっとそばに居てくれたし、なんとかしようとしてくれた……頼ってばかりじゃないよ。それに血が繋がっていなくとも、僕の父さんは父さんだけだし」

ギル「恭介……我は……我は……恭介ええええええ！！」

恭介「ちよっ、とうさん！？」

ギル「すまん、すまんんん！！」

恭介「だ、大丈夫だよ！ それにセイバーさんっていうお母さんがいることもわかったし。お母さんの話をきかせてほしいな？」

ギル「任せろっ……！ セイバーという人物はな……」

家族の絆が深くなった夜であった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1481y/>

---

英雄王に拾われし子

2011年12月17日01時57分発行